

# ねぶた・ねぷたと 津軽の子ども・学校



弘前市立北小学校「だるまねぶた」の制作・墨入れ

編 著

大 谷 良 光 （弘前大学教育学部）

弘前大学教育学部「ねぶた・ねぷたと学校教育」研究プロジェクト

文部科学省・科学研究費補助金(基盤研究(C)一課題番号20530840、平成20年～23年)

津軽ねぶた・ねぷたの教育化～調査研究とカリキュラム開発

最終報告書（第4年次）

# はじめに

## プロジェクト代表 大谷良光

11年前、弘前大学に赴任して夏のねぶた祭りに出くわしたとき、なんとも言えぬ感動が込み上げてきた。「このねぶた祭りに子ども達がどのように関わっているのだろう」、「このねぶた祭りは子ども達の成長にどのような影響を与えているのであろう」、「このねぶた祭りを学校教育でどのように取り入れているのであろうか」、等の疑問が生じた。是非、この疑問を研究課題にして取り組みたい、祭りの興奮の中で考えていた。

その後、他の研究課題に追われ、ねぶた・ねぶた祭りに関する研究に着手することができなかったが、2005年に私のゼミにねぶた師内山龍星氏の愛弟子であった立田健太君（教育学部生涯教育課程）が所属することにより、彼の卒論研究を支援する機会に恵まれ本課題に取り組むことができた。そして、本課題を科学研究費に応募し2008年度に獲得することができた。以後、4年間、ねぶた・ねぶたを研究したい学生がゼミに加わり、彼／彼女らが核となり本研究が展開されてきた。したがって、本書は、立田君と開始した以後7年間の研究成果の報告書となる。

## (1) 研究目的と研究計画

### 1. 研究目的

本研究の目的を、科学研究費申請書に下記のように記した。

都市部と農村部の地域格差が拡大し、様々な統計においてワーストに名を連ねる本州最北端の青森県において、「地域の再生」「地域の活性化」は、県内唯一の国立大学法人大学にとって重要な課題である。また、子どもは地域の宝であり、公立学校は地域を再創造していく「地域づくり」の拠点である。

ねぶた・ねぶたは、津軽人の誇りであり地域の貴重な伝統文化である。そして、観光産業としても重視されており、地域再創造施策の重要な課題である。青森市は、2001年に「青森ねぶた保存伝承条例」を施行し、市として青森ねぶたを保存・伝承・発展させることを目的とし、学校教育においても、条例の目的を達成するため「教育の場における青森ねぶたの保存及び伝承についての教育」を位置づけた。

ねぶた・ねぶたは、津軽地方の各市町村で行われている。その中で、観光客が多数観覧するものが、青森ねぶた、弘前ねぶたと五所川原市の立佞武多である。青森ねぶたは、8月2日から7日まで合同運行される企業・団体を中心とした大型組(人形)ねぶたがメインではあるが、その前後の日程で運行される地域ねぶたの台数の方が多く、また、その台数も近年増え続けている。そして、多くの子どもたちはこの地域ねぶたに、町会ねぶたの一員として囃子方、ハネト、曳き手として参加している。そして、この地域ねぶたに、学校、PTA、地域子ども会が団体として参加し運行しているものもあり、その数は年々増える傾向にある。

一方、弘前ねぶたは、企業・団体の大型扇ねぶたとともに、大型地域扇ねぶた、前ねぶたとしての小型扇ねぶた、小型組ねぶたが合同運行され、子どもたちは、企業、団体、地域のねぶた運行の囃子方、曳き手の一員として参加している。そして、他の津軽の市町村も弘前ねぶたのように企業ねぶた・ねぶた（以下同時に使用する場合は「ねぶた」で省略

する)、団体「ねふた」、地域「ねふた」の合同運行が一般的である。

また、「ねふた」は地域での行事のみでなく、公立学校において、学校内運行や、地域運行を独自に行い、学校行事として伝承しているところも少なからず存在する。これら「ねふた」の制作や運行を行っている教育実践は、地方新聞に掲載されることが多い。

本研究は、学校が地域を再創造していくために「地域づくり」の一環として「ねふた」を位置づけ、子どもの「ねふた」に対する意識や、学校の「ねふた」への関わりを明らかにし、学校が地域と連携し教育課程を編成する場合の資料として活用するためのカリキュラムを開発し、津軽の子どもたちの人格形成の一端に寄与し、「ねふた」の普及に貢献することを目的としている。

先行研究を調べたところ、残念なことに、「ねふた」への学校教育の関わりや、子どもの意識を明らかにした調査報告は、看過する限り見あたらない。われわれが2005～2006年度に「青森ねふた・弘前ねふたへの子どもの関わりと意識」のパイロット調査を実施し、2006年7月に調査結果を公表したところ、地方新聞が大きく取り上げたことから、このような調査が県民に待たれていたことが伺える。

## 2. 研究の目標(計画)－研究期間内に明らかにする内容

本研究の目標は2つあり、それを達成するため期間前半が調査研究、後半がカリキュラム開発とその普及となる。

### 《研究の第1段(前半－調査研究)の内容》

①青森市、弘前市の小・中・高等学校に限定し、学校として「ねふた」を運行している実際と、学校教育内容で取り上げている「ねふた」に関わる教育課程・教育内容、子どもたちがどこまで主体的に関わっているのかの指導過程について調べ(以下「学校調査」と省略)、「ねふた」と学校教育の関わりを明瞭にする。

②「ねふた」に関わる教師と関わらない教師の「ねふた」に関する意識調査(以下「教師意識調査」と省略)を行い、「ねふた」を学校教育で取り組む意義をどのように理解しているかを整理する。

③小学生、中学生、高校生の「ねふた」への意識調査(以下「子ども意識調査」と省略)と「ねふた」への子どもの関わり調査(以下「子ども関わり調査」と省略)を行い、「ねふた」への子どもの意識と、子どもの関わり方を明らかにする。

### 《研究の第2段(後半－カリキュラム開発とその普及)の内容》

④予備調査で明らかになったことは、(1)「ねふた」を扱う教育課程の領域は、総合的な学習の時間、特別活動、PTA子ども会活動、教科(技術科、美術科等)である。(2)子どもも教師も「ねふた」の魅力は、祭りそのものと同時に本体(金魚ねふた等を含めて)の製作・制作にあると思われる。そこで、多くの子どもたちが製作・制作を行うことができる、本体(基本製作工程を含んだ簡易なもの)とカリキュラムを、各領域に対応させ、学校教員とねふた師、サポート学生、学部教員の協働で開発する。

⑤開発したカリキュラムと題材(本体)により、実施できる領域において、協力校4校で実験授業を実施し、その教育的効果と子どもの変容を検証する。

⑥以上の研究成果を、冊子としてまとめ、青森の小・中・高等学校、教育委員会、各市祭り実行委員会、マスコミ等に配布し、その普及に努める。

## (2) 研究結果(構成の概要)

研究の第1段(前段)の計画は、概ね達成した。「学校調査」「子ども意識調査」「子ども関わり調査」は、規模数も対象市も拡がり、貴重な成果が得られた。予定した「教師調査」は、諸般の事情で実施する事ができなかったが、研究途上で必要になった「**運行団体調査**」が、青森市、弘前市の協力で実施する事ができ、学校教育でねぶた・ねぶたを実施するときの「環境」が明確になった。

研究の第2段(後段)は、達成することができなかった。その要因は2つある。

一つは、研究代表の大谷の内的な理由である。2009年4月に、弘前大学ネットパトロール隊を発足させ、弘前市と協定して学校裏サイト等の探索・監視活動を開始し、また、県内の教育機関、PTA、学校に呼ばれて、講演や出前授業を行うようになり(ネットリスク教育)、さらに、ネットリスクを確定するための調査活動が必要になり、大規模な調査活動を展開するようになったため、私の研究活動のウエイトがネット問題に傾斜し、ねぶた研究に割く時間がなくなってしまった事による。

二つは、祭りには子ども達が多数参加しているが、学校教育で取り上げているところはそう多くなく、ねぶた・ねぶた制作から祭参加まで本格的に取り組んでいる学校は極めて少なかった。取り入れているところも「ねぶた馬鹿」といわれる「ねぶた・ねぶた愛好家」の教師・校長の奮闘により実施されている状況であった。また、学校は教育改革の荒しや、新学習指導要領(2008年版)による時間数の確保で、ねぶた・ねぶたを授業として取り組む余裕がないと思われ、「汎用のカリキュラム」を提起する「意志」が弱まったことにある。

しかし、計画の4校での実験授業は実施できなかったが、弘前市立北小学校で実施できた。また、本報告書に時間的問題で収録できなかったが、進学校でありながら1953年(昭和28年)より継続し「伝統的学校行事」となっている「弘高ねぶた祭り」を、歴史的に、また、生徒の取り組み状況、その中での意識変化等を調査した。来年度2013年に60周年を迎える、弘高ねぶた祭りに向けてまとめて公表する予定である。

本書の構成は、第I部で、我々が開発した「ねぶた・ねぶたの汎用カリキュラム」を報告する。今回は、小学校4年生を対象とした「だるまねぶた」の制作であったが、この教材は、中学生でも高校生でも十分満足頂けるものと思われる。本教材で取り組む場合、学年ごとのカリキュラムの違いは、どこまで大人が補助するかで調整(教育内容)することができる。模擬授業で、私のゼミ生を対象に実施した経験では、彼/彼女らはほとんどが初のねぶた制作であったが、予定時間内で仕上がり(グループによる時間差は生じる)、感想は「大満足」であったことからいえる。

第I部に収めた指導案は、授業者の学生(学部2年生)が4年生の指導を受け作成したものであり、不十分であるが授業の流れは理解できる。カリキュラム評価として、子ども意識変化を授業前後で調査した。調査項目には検討する点も残しているが、子ども達の意識変化が読み取れた。

第II部は、モデルカリキュラムを作成するために、2~3年間かけて**訪問調査**した、ねぶた制作とねぶた祭りを実施している6校についての取り組みの報告である。この6校を抽出した根拠は、2006年度に実施した、2市の学校調査を踏まえ、実施している全校の訪問調査を行い、製作・製作から祭り参加まで実施し、さらに継続的に訪問調査をしてもよいと了解できた

学校を、各市、小・中・高校1校に絞ったものである。特に配慮した点は、本プロジェクトの学生メンバーの中に、対象校の出身者がいることで、自分の体験を踏まえて調査できることが望ましいと考えた点である。ただし、青森市の高校として選出した、青森工業高校は、部活を中心としての活動のため本報告書にまとめることを省略した。また、弘前高校については、前述のように本書への収録が間に合わなかったため、後日別冊としてまとめる予定である。

各記録は、(1) 学校の概要と祭りの歴史、(2) 活動領域と内容、(3) 祭りの様子に分けて記載し、祭りはカラー写真で収めた。

第Ⅲ部は、ねぶた・ねぶたと学校教育の関わりを明確にするための「**学校調査**」であり、2006年度の2市の調査と、2010年度の4市の調査を収録した。この調査の目的は、第1に街興しとして市が精力的に取り組んでいる五所川原市と黒石市を含めた4市の公立小・中学校において、ねぶた・ねぶたを取り入れた教育実践がどのように行われているかを明らかにすることである。第2に前回調査から4年経過した今、学習指導要領の改訂により取り組みに変化が生じたかを調べるためである。

調査項目は、(1) 学校がねぶた・ねぶたに取り組んでいるか否か、(2) 取り組んでいる活動内容（製作・製作型、参加・運行・練習型）、(3) 制作型では何を制作しているか、参加・練習型では、どんな祭りに向けて、練習しているか、(4) これらの活動は教育課程のどの領域で実施しているか、(5) ねぶた・ねぶたの学習や講話を実施しているか、しているならばどんな内容で誰が担当しているか、であり、これらの結果から各市の特徴を明らかにし、また前回の調査との比較で検討した。

4市の調査は、2011年2月（2010年度）に実施したが、私の事情で1年近く発表が遅れたため本書での報告が初となる。各市関係者、ねぶた関係者にとって関心のある調査と思われるため、本年の6月には記者会見を行い県民に公表する予定である。

第Ⅳ部は、「**子ども意識調査**」と「**子ども関わり調査**」の「**子ども調査**」の報告である。

第1章は、2005年に実施した子ども調査の予備的調査であり、対象調査数も少ないものであったが、このような調査が今まで無かったためか、マスコミ各社が大きく取りあげた。

第2章は、2005年度調査を踏まえ、2008年に実施した4000名を対象にした大規模子ども調査の報告である。

第3章は、青森ねぶたにおける「若者ハネト離れ現象」がささやかれた中で、その実態を調査してほしいという「青森ねぶた祭り実行委員会」の要請を契機に、高校生の意識を明らかにする必要があると判断して実施したものである。

第Ⅴ部は、当初計画には無かったが、学校での取り組みに、地域ねぶた・ねぶたの運行団体が関わることが多いことが判明したため、運行団体がどのような問題意識であるかを知る必要性を認識し実施した。2市の協力もあり、このような調査としては回収率の高いものとなりその実態が明確になった。第1章が青森市、第2章が弘前市の調査報告である。

第Ⅵ部は、本研究の導火線の役割を果たした、ねぶた弟子・立田健太さんの学生時代に実施した授業記録である。彼の卒論から転用させて頂いた。

### (3) 研究組織

研究組織は、下記のものであった。《 》内は、主な研究担当

- 研究代表者 大谷良光（弘前大学教育学部・教授）《全体統括》
- 研究分担者 蝦名敦子（弘前大学教育学部・教授）《研究計画への助言》  
佐藤紘昭（弘前大学教育学部・教授）（2008年～2009年）《青森高校生調査》
- 連携研究者 立田健太（ねぶた師内山龍星の弟子・青森工業高校講師）《全体》  
三浦俊一（ねぶた組師）（2009年～2010年）《弘前市運行団体調査》
- 研究協力者
  - 大野絵美（教育学部4年生）《青森市立古川小学校調査》
  - 鎌田沙穂（教育学部3年生）《全体・プロジェクト事務局長》（2009年～2011年）
  - 飛嶋健太（教育学部4年生）《弘前高校調査》（2008年～2009年）
  - 平根江梨（教育学部4年生）《青森市立古川小学校調査》
  - 清藤範子（教育学部3年生）《弘前市立津軽中学校調査》（2009年～2011年）
  - 山内勇輝（教育学部2年生）《弘前市立北小ねぶた制作指導》（2010年～2011年）
  - 沼田萌生（教育学部2年生）《弘前市立北小ねぶた制作支援》（2010年～2011年）
  - 鈴木悠太（教育学部2年生）《弘前市立北小ねぶた制作支援》（2010年～2011年）
  - 佐々木一翔（教育学部2年生）《弘前市立北小ねぶた制作支援》（2010年～2011年）
  - 成田柚季子（教育学部2年生）《弘前市立北小ねぶた制作支援》（2010年～2011年）
  - 工藤友哉（教育学部1年生）《弘前市立北小ねぶた制作支援》（2011年）
  - 遠藤蒼介（理工学部1年生）《弘前市立北小ねぶた制作支援》（2011年）

#### \*註 用語の使い方について

本論では、青森ねぶた、弘前ねぶた、立佞武多を総合して表すときに、「ねぶた・ねぶた」「ねぶた」と二つの表記を使用し、単独で用いるときには、それぞれの呼称を使用した。

# 目次

はじめに	1
(1) 研究目的・研究計画    (2) 研究結果    (3) 研究組織	大谷良光
目次	
<b>第Ⅰ部 ねぶた・ねぶたのキュラム開発</b>	7
～弘前市立北小学校4年生でのだるまねぶた制作～	鎌田沙穂・山内勇輝・大谷良光
第1章 指導計画	
第2章 授業記録	
第3章 子どもの意識変化調査	
<b>第Ⅱ部 ねぶた・ねぶた祭り実施校への訪問調査</b>	34
第1章 青森市立古川小学校	大野絵美
第2章 弘前市立北小学校	鎌田沙穂
第3章 青森市立北中学校	山内勇輝
第4章 弘前市立津軽中学校	清藤範子
第5章 弘前高校―――別冊(2012.12完成)	飛嶋健太・鎌田沙穂・大谷良光
<b>第Ⅲ部 ねぶた・ねぶたと学校教育との関わり～調査研究1(学校調査)～</b>	56
第1章 2市(青森・弘前)の小・中学校でのねぶた・ねぶたと 学校教育との関わり調査(2006年度)	井上怜央・大谷良光
第2章 4市(青森・弘前・五所川原・黒石)の小・中学校でのねぶた・ねぶたと学校教育 との関わり調査(2010年度)～2006年度2市調査との比較～	鎌田沙穂・大谷良光
<b>第Ⅳ部 ねぶた・ねぶたと祭への子どもの意識の関わり～調査研究2(子ども調査)～</b>	83
第1章 青森ねぶた・弘前ねぶたへの子どもの関わりと意識～青森市・弘前市内小学校4 年生を対象とした調査～ 紀要96号	大谷良光・立田健太・井上怜央
第2章 青森ねぶた・弘前ねぶたの子ども意識と祭りへの「思い」調査 ～青森市・弘前市公立学校小・中・高校生4,000名～	立田健太・大谷良光
(1) データ報告書	
(2) 青森ねぶたの子ども意識調査の概要と青森市への提言	
(3) 弘前ねぶたの子ども意識調査の概要と弘前市への提言	
第3章 ねぶた祭への高校生の観察・参加状況と祭への意識(思い)調査 ～ハネト若者離れ問題を焦点として～	立田健太・佐藤紘昭・大谷良光
<b>第Ⅴ部 ねぶた・ねぶた祭り運行団体と子ども・学校との関わり調査(運行団体調査)</b>	149
第1章 青森ねぶた運行団体と子ども・学校との関わりの実際～大型・子ども・地域ねぶ た運行団体を対象とした調査～	立田健太・大谷良光・大野絵美
第2章 弘前ねぶた祭り運行団体と子ども・学校との関わり現状と意識 三浦俊一・大谷良光・立田健太	
<b>第Ⅵ部 ねぶたの授業実践記録</b>	167
青森市立大野小学校での講話と金魚ねぶたの制作(2005年度)	立田健太
あとがき	177
	大谷良光